

レトロな学び舎

(上)

あの頃をもう一度！

野口津義夫

マンションの管理員の岡部は、ある日、居住者に思わず冗談を発してしまった。日頃真面目な人間として通っている彼のシャレに居住者は啞然としたが、これには訳があった。彼は最近、甲州街道をちょっと入ったところにある秘密の居酒屋「シャレこうべ」に通い出したのである。ところが、五階の主婦の品子は岡部を尾行し、遂に彼の正体を突き止める…。

レトロな学び舎（上）

第一章	悲恋の聖女	3
第二章	秘密の居酒屋	25
第三章	美形のエッセイスト	44
第四章	教授の変心	69
第五章	謎の管理員	89
第六章	マドンナを囲んで	110
第七章	講演会での顛末	137
第八章	丸井の再会	164
第九章	夫婦仲良く	191
第十章	ファーストレディーを迎えて	215

第一章 悲恋の聖女

二〇〇八年の夏——。七月上旬のある日、川森梨枝子は、ハードな勤務を終えて手に入れた二日間の公休日に思わず顔を綻ばせた。実際、看護師の仕事は口では言えないほど辛い。この気持ちには、変則的な労働を強いられる職種の人でないといわかってくれない。

『わたしの気持ちを理解してくれるのは、タクシーの運転手さんか、警備員の方ぐらいかしら』
また、それだけではなかった。突然、早番になったり、他の人の都合でローテーションを狂わされたりする。

『わたし、もしかして倒れるまで働くことになるのかしら』

苦しいけれどやり甲斐のある仕事だったので、それならそれでいいと梨枝子は思った。

『倒れても職場が病院だから何とかなるわ』

彼女は樂觀的に考えたが、それは半ば諦めでもあった。

梅雨明けはまだだった。額からにじみ出てくる汗を拭いて、梨枝子は朝食の仕度をした。本当なら暑さ対策のために、きちんとご飯を食べるのがよいのだが、疲れ切っていて作る気力がなかった。こんな具合だったので、急須にお茶の葉を入れるのも億劫だった。

こんな時、パン食は都合がいい。梨枝子は食パンをトースターに突っ込んだ。そしてティー・バッグも、お湯を注ぐだけだったから重宝だった。

極度に疲れている時は、ビタミン剤やドリンク剤を飲んでも、まるで効かない。血圧の低い彼

女は、頭の回転をよくするために紅茶にスティックシュガーを二袋入れた。そして冷蔵庫からバナナ、チーズ、ヨーグルト、それにソーセージの類を取り出した。これらはすぐに食べられるし、即効性があるような気がして、仕事柄、疲労困憊の時を想定しての彼女の常備食となった。

梨枝子は紅茶を飲みながら、ふと、半袖のセーターから伸びている自分の白い腕を見やった。そして同じように、スカートから伸びている自分の軽やかな脚を眺めた。こんなにも年をとったのに、ほとんど二十代の時と同じ体型を保持していることに、彼女は何か心のときめきを覚えた。急に自分の身なりが気になった梨枝子は、ティーカップを置いて、自分という女を確かめてみたくなって、姿見を求めて和室に入った。

『あれから三十五年も経ってるんだわ』

女は、二十代や三十代の人の着ている衣服を四十代や五十代の人が着ても、そんなに違和感はない。セシルマクビーの、首周りを露にした白と黒の横縞の半袖セーターと、白地にピンクとグレーのチェックスカート姿の自分に、彼女はまだ自信を持つことができた。

『わたし、もうお婆さんなのね。でも、まだ綺麗だわ』

朝食を終えて鏡台の前に座った梨枝子は、レスポートサックからランコム薬用ホワイトニング化粧水や美容液を取り出した。疲れてはいたが、久しぶりに外出してみる気になったのである。そして肌を整えてから、UVエクスペールを顔全体から首にかけて伸ばした。思い切って若返ってみようと思った彼女は、リップの後、オークションで購入したフランボワーズのリップグロスを手に取った。

彼女は、あの時とほとんど変わらない自分のお嬢さん姿に、何歳になっても同じままの自分に幼稚さを感じつつも、まるで青春の頃から時間が停止してしまったかのように、一瞬、無垢な乙女の思い出に浸った。

『あの頃は本当に幸せだったわ…』

一九七三年——。二月、一ドル三〇八円だった固定相場制が変動相場制に移行。四月、祝日法が改正され、振替休日制を導入。七月、日本赤軍によるドバイ日航機ハイジャック事件。八月、金大中事件。九月、国鉄でシルバーシート初登場。十月、オイルショック。十一月、セブンイレブン設立。

それは彼女が二十歳の時だった。看護短期大学に通っていた梨枝子は、ふとしたことから、ある大学の学園祭で沢本陽二と知り合った。当時、文学部の三年生だった沢本は、いかにも聖女という感じの梨枝子を一目で好きになった。

「文学というのは現実じゃないでしょう。架空の話、言ってみれば単なる作り話なのに、名作は何十年、何百年、いや何千年という時を超えて読み継がれ、現代人の心に語りかけてくる堅固な力を宿している。そう思うと、文学というものは一体何なのだろうかと、本当に不思議でたまらなくなるんです」

梨枝子と視線の合った沢本は、彼女を何とか引き止めようと一生懸命だった。自分の所属する

「文学研究会」での一コマだった。

まったく分野の異なる梨枝子は、文学という荒唐無稽な学問に携わっている人間の、抽象的な真摯さに返答の仕様がなかった。

「あのう、あなたの言いたいことはわかってます。作り話だと言っても、その中に真実が描かれていれば現実に訴える力を十分持っている、ですね。でも、僕に言わせれば、それは以前から言われてきた決まり文句に過ぎないんです」

目前の聖女は、ぼかんとして黙り込んでいたが立ち去る気配はないと知って、沢本は彼女に語り続けた。

「話は飛びますが、あなた、どう思いますか」

「何のこと？」

「いや、それはまだ話していません。これから話しますけど、どう思うか、ちょっと聞いてみてください。あなたの理想のカップル像は、理系出身の男子学生に文学部出身の女子学生でしょう？ちなみに、僕は理系出身じゃなくて残念ですけど……」

容姿から梨枝子を文学部の学生だと推察して、沢本が弁解した。

「あのう、わたし、専攻は看護学です。でも、やはり、その方がいいのかしら」

「へええ、そうだったんですか……」

ちやうど理想的カップルの逆になったみたいで、沢本は氣勢をそがれた。彼は少なくとも「同類」を期待していたのである。

「でも、それが今の話と何の関係があるの？」

「ですから話が飛ぶって言ったでしょう」

「あら、そうだったわね」

「結局、そういうのが、僕に言わせれば決まり文句なんです」

沢本は当てが外れて、かえって語気を強めた。

「つまり、常識に囚われてはいけないってことね」

「そう、その通りです」

「どうぞ」

研究会のメンバーの美帆子がコーヒーを持ってきた。

「ありがとう。ところで、ここ、喫茶店でもあるの？」

「はい、文学喫茶店です」

沢本がすかさず答えた。

「冗談よ！この人、時々変なことを言うんです」

また始まったと思つて、呆れて美帆子が言った。

打ち解けた三人は、教室半分を陣取つた文学研究会のスペースの一角で、文学に関する四方山話に花を咲かせた。

やがて美帆子は来客の対応のため席をはずした。

『『こういうのが本来の学生生活なんだわ』』

梨枝子は、自分の周囲で素敵な格好をして自由に振舞っている同世代の若者達を羨ましく思った。

「いろんな人がいて、いろんな考え方があって、文学って面白いのね。看護学の場合は、検証済みの理論や効果的な実践の仕方が既にマニュアル化してるので、ユニークな発想や行動なんて、まずないわ。その点、文学は自由でいいわね」

「うん。それが文学の特権だからね」

沢本は誇らしげに言った。だが、それは裏を返せば文系の人間の劣等感でもあった。

『第一、人命に関する危機に陥った時、文学論や芸術論なんて何の意味があるのだろうか…』

美帆子が戻ってきて言った。

「実は、わたし達、『文学研究会』という名称を変えようかと話し合ってるの」

「うん、そうなんだ。文学っていうのは一筋縄ではいかない曲者なんだよ。確かに自由でいいんだけどね…」

困った顔をして沢本が言った。

「ありふれた名前ってこと？」

「それも理由の一つだけど、僕達の活動そのものと矛盾してるんだよ」

「？」

「わたし達の行っているのは、ある作家のある作品について研究するという、一般的によくあるような研究ではないって気づいたの。わたし達の研究は、なぜ名作はフィクションなのに時を超

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。